

## 5 意外な展開



## 梁 哲成 先生

やんハーブクリニック

1986年 岐阜大学医学部 卒業  
 1987年 同大学医学部附属病院小児科  
 1988年 敬愛会中頭病院小児科、雞林東医学院学院長・梁哲周に師事  
 1989年 養老中央病院小児科 部長、日本橋芍薬医院院長・梁哲宗に師事  
 1990年 敬愛会中頭病院小児科・内科  
 1994年 やんハーブクリニック開院

日本東洋医学会 専門医・指導医、日本小児科学会 専門医  
 著書「三大法則で解き明かす 漢方・中医学入門」

## はじめに

患者の病状について、意外な展開を経験することがある。とりわけ漢方診療においてはしばしば見受けられるが、今回はそのような経験をした症例を提示する。

## 症 例

## 症例1：14歳 女児 めまい

主 訴：めまい

現病歴と現症：現病歴と現症を表1に示す。証を脾虚水飲、治法を補脾滌飲と考えた。

経 過：苓桂朮甘湯を投与したところ、投与2週後には、めまいと立ちくらみは著明に軽減、8週後には消失した。その後も再発を認めないため、約1年後、漢方薬の投与を終了した。ところが中止1ヵ月後、めまいや立ちくらみの再発がないにもかかわらず、母子ともに同薬の再服用を希望し、再受診し

表1 症例1 めまい 14歳 女児 現病歴と現症

2～3年前から、連日、立ちくらみとめまいを繰り返す。めまいは浮動性で、甚だしいと立ってられない。立ちくらみも度々起こし、倒れて頭を打ったこともある。  
 食は細く、食後は眠くなる。痩せていて、疲れやすくよく「だるい」と言っては横になりたがる。診察時も猫背で姿勢が悪い。  
 天気が悪い日には諸症状は一層悪化する。  
 近医で諸検査を受け、起立性低血圧と診断され投薬されるが良くならない。  
 脈：やや弱、舌：淡紅

たのである。実は…、患児はめまいや立ちくらみがあった頃から朝の起床が辛く、学校に行けない日が多かった。また、抑うつ状態が続きメンタルクリニックでSSRIを投与されたが全く効果がなかった。ところが苓桂朮甘湯を服用すると、めまいと立ちくらみだけでなく、抑うつや意欲の減退も改善し、朝も起きられるようになった。しかし同薬中止後、再び体がだるくなり、やる気も起こらなくなってきたため、服用再開を希望したのであった。再開後、心身いずれの症状も起こしていない。

## 症例2：15歳 男児 アトピー性皮膚炎

主 訴：痒痒

現病歴と現症：現病歴と現症を表2に示す。標証を肝風、標治を熄風と考えた。

経 過：抑肝散加陳皮半夏を投与した。投与1ヵ月後、痒み発作は月に2回に激減した。投与約4ヵ月で、全身の皮膚は軽度のドライスキンを残すのみとなり、塩酸フェキソフェナジン投与は中止、ステ

表2 症例2 アトピー性皮膚炎 15歳 男児 現病歴と現症

幼児期からのアトピー性皮膚炎で、半年前から通院している。初診時の顔面、頸部、腹部、腰部、四肢屈曲部、下肢外側部の湿疹とほぼ全身のドライスキンに、Ⅲ～Ⅳ群のステロイド外用薬、スキンケアと保湿外用薬、塩酸フェキソフェナジン内服で治療を開始した。  
 4週間の経過で各部位の炎症も速やかに軽減し、良好にコントロールされつつあったが、週に2～3回急に下肢外側部と両側頭部の強い痒みが起こり、掻き始めるとなかなか止まらなくなる。  
 痒みは試験前などの緊張したときやイライラしたときに多い。  
 脈：弦、舌：淡紅白苔薄

ロイド外用薬も2ヵ月で5g以下に減量した。その後も症状が安定したため、抑肝散加陳皮半夏の投与を中止しようとしたところ、母親は強く継続を希望したのである。実は…、服用前までは患児は常に不機嫌で、怒りやすく、自宅ではしばしば急に怒鳴りだしては物を投げていた。しかし、服用し始めてからは、不機嫌も軽くなり、発作的に起こる怒りも激減し、物を投げることもなくなった。そこで、その後も同薬の服用を希望したのであった。

**症例3：8歳 女児 反復性腹痛**

**主 訴：**反復性腹痛

**現病歴と現症：**現病歴と現症を表3に示す。標証を胃気滯、標治を理気・柔肝と考えた。

**経 過：**小半夏加茯苓湯と芍薬甘草湯を投与した。その結果、腹痛は劇的に改善し、飲み忘れた時に少し痛くなる程度であった。

その後、改めて東洋医学的診断を行い、本証は肝気鬱結・肝気横逆、本治は疏肝解鬱・柔肝・理気と考え、四逆散+小半夏加茯苓湯に変方した。これにより患児の腹痛は消失した。他方で診察中、母親がしばしば些細なことで子供を叱りつけていた。

実は…、看護師の予診によると、親子は生活保護を受けている母子家庭であり、金銭の援助を受けていた祖母が亡くなってから生活が苦しくなり、母親は患児にしばしば当たってしまうという。子供の腹痛は、胃気滯・肝気鬱血、そして家族の死が原因と考えていたら、実は母親からのストレスもあったのである。母親も漢方薬を希望したため加味逍遥散を投与した。その後、患児に腹痛はなく、

**表3 症例3 反復性腹痛 8歳 女児 現病歴と現症**

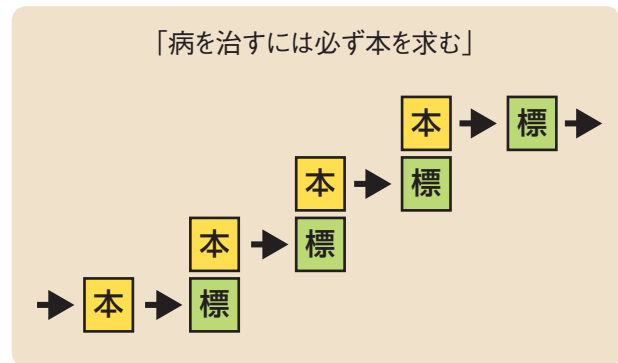
<p>1ヵ月前から<b>持続性の心窩部痛</b>がある。                  昨年に伯父が、1ヵ月前に大好きだった<b>祖母が亡くなった</b>。  <b>痛みの激しい</b>ときは、泣きながら夜も眠ることができないほどだと言う。時に頭痛も伴う。                  近医で血液生化学検査、腹部エコー、腹部X線などの検査を受けたが異常は認めず、胃粘膜保護薬、H<sub>2</sub>ブロッカーを処方されるも効果はなかった。                  診察時、眉間にしわをよせ、<b>前かがみになり呻って痛がっている</b>。</p>
---

2週間で終了しても再発せず、さらには母親の諸症状も軽減した。

**考 察**

一個体の諸症状、さらには社会の中における病は、おおよそ何らかの因果性をもって起こっているという考え方がある。漢方医学ではとりわけその観点から重視され、標と本、標治と本治という学説によって解説されている(図)。今回紹介した3症例はいずれもそのようなことを示唆する症例であった。

**図 標治と本治**



**COMMENTS**

**後山：**苓桂朮甘湯がうつ状態を改善したことについて、喜多先生はどのように考えられますか。

**喜多：**漢方では心身一如という発想で、心が体に影響するだけではなく、体も心に影響すると考えます。したがって苓桂朮甘湯で身体的症状が改善すると、心も改善します。もちろん構成生薬から安神作用や気の巡りをよくする作用が期待されますが、むしろ体から心に働きかけるという漢方の特徴がうまく発揮されたケースだと思います。

**後山：**SSRIが無効でもあきらめてはいけない、“病は気から、気は病から”ということに立ち戻って考えてみようというお話でした。